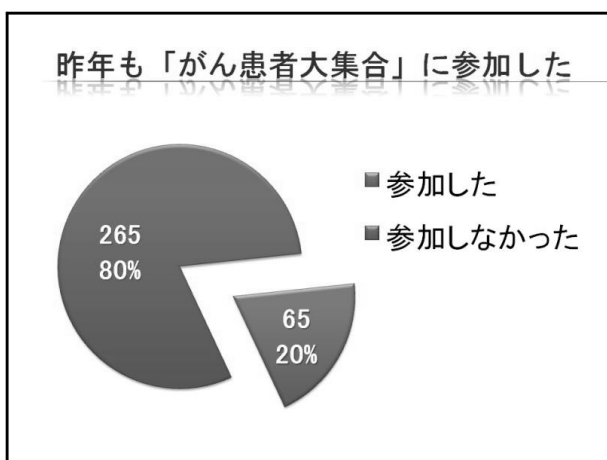
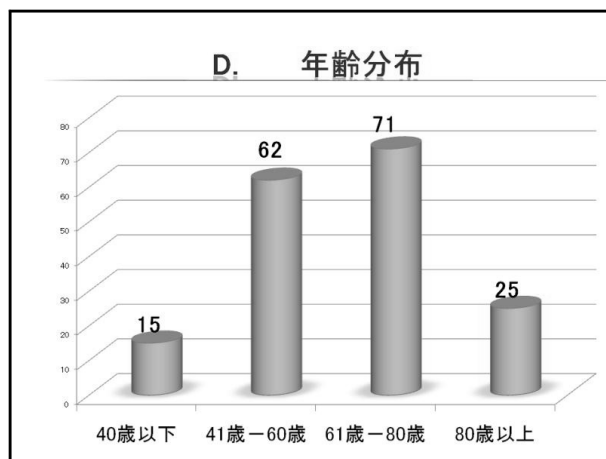
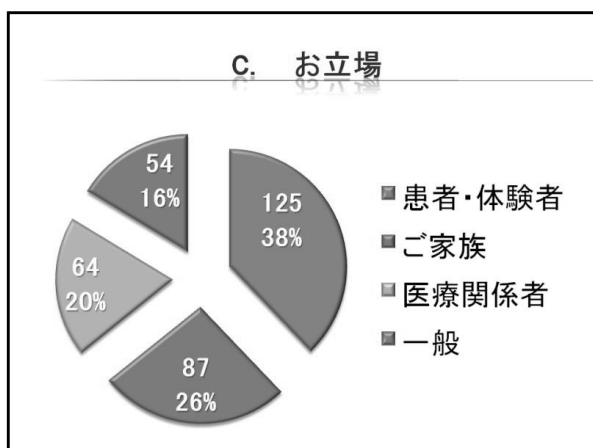
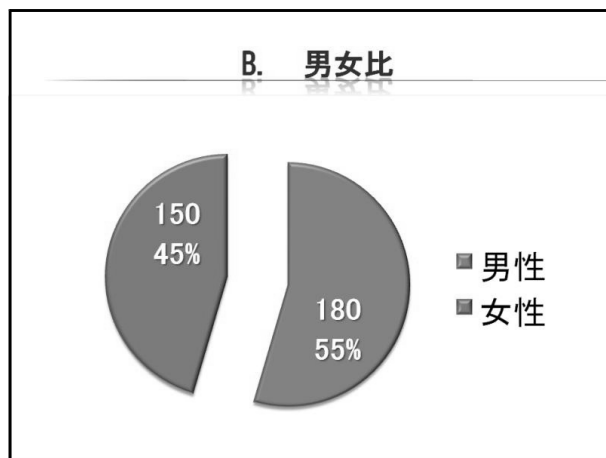
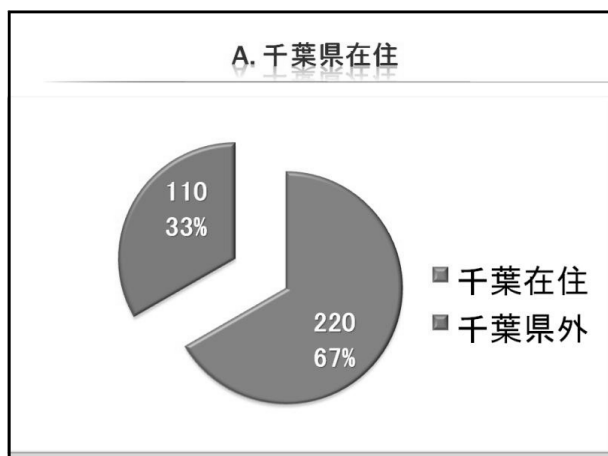


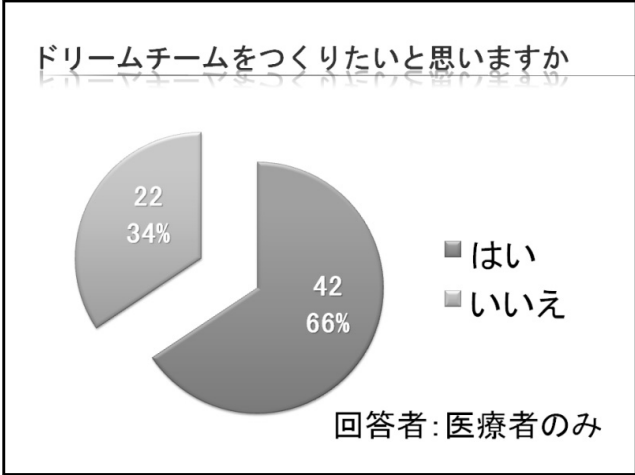
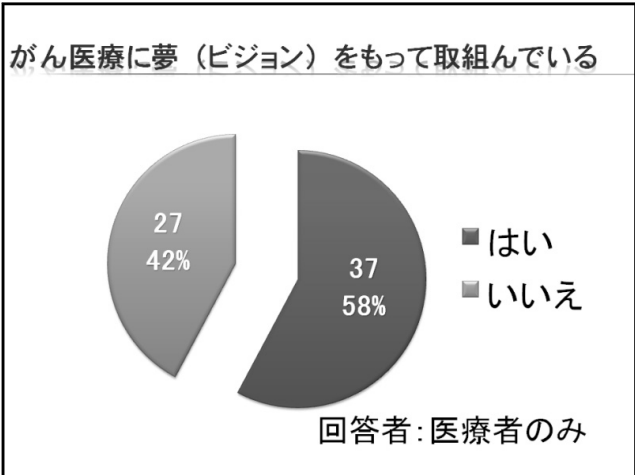
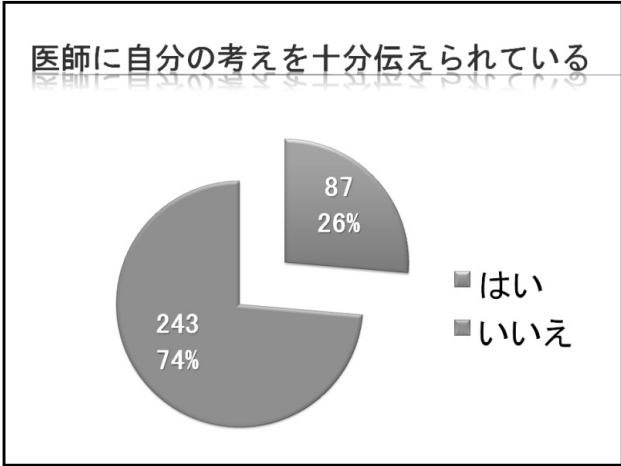
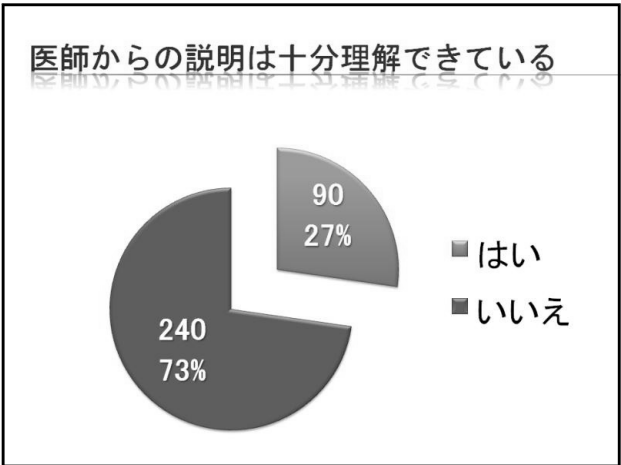
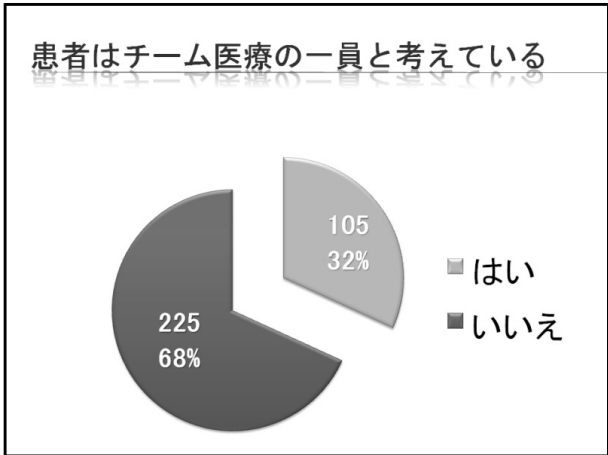
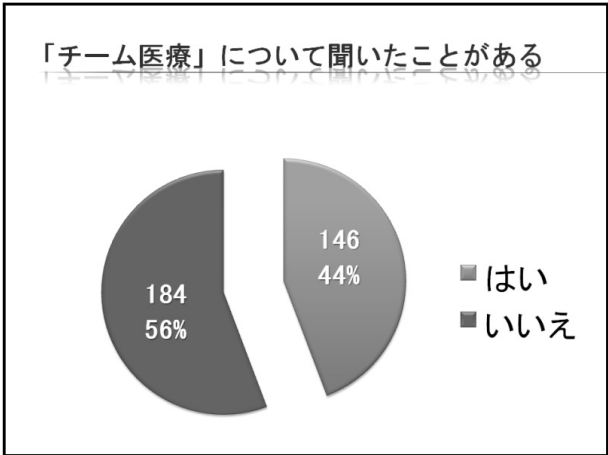
アンサーパッドによる参加者の回答

参加者プロフィール

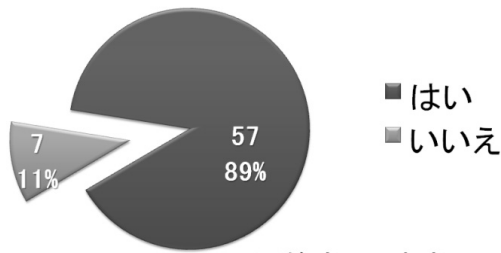


- ・千葉県外からも110名（33%）の参加があった。
- ・男女比は男性が55%と、わずかに女性を上回った。
- ・患者・家族の参加が64%と多かった。
- ・年齢は41歳から80歳が77%を占めた。
- ・昨年に引き続き参加した方は20%、初参加が80%と圧倒的に多かった。

テーマ1 最善のがん医療を受けるために



患者はチーム医療の一員と考えている

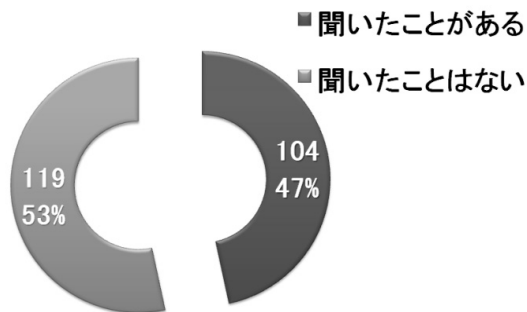


回答者:医療者のみ

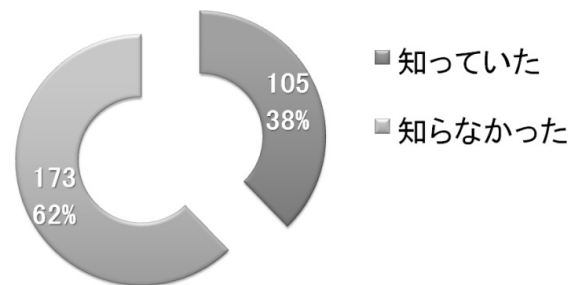
- ・チーム医療も知られてきたが、まだ半数以上の人が知らない状態。患者はチーム医療の一員と考えている人はさらに少い。
- ・医師の説明を理解できている人は27%と少ない。4人に3人はよく理解できず、従って自分の考えを医師に十分伝えることも出来ずにいる。
- ・医療者でがん医療にビジョンを持って取り組んでいる人は半数以上。その人たちはドリームチームという考えにも共感している。
- ・医療者のほとんどが患者はチーム医療の一員と考えている。しかし、患者はそうは考えていないところにギャップがある。

テーマ2 千葉県がん診療連携拠点病院について

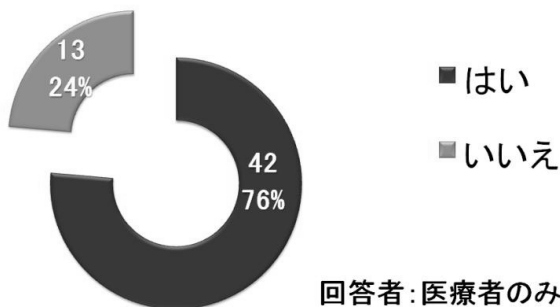
がん拠点病院という言葉聞いたことがある



がんの相談窓口があることを知っていた

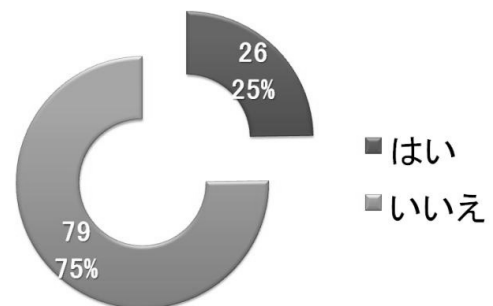


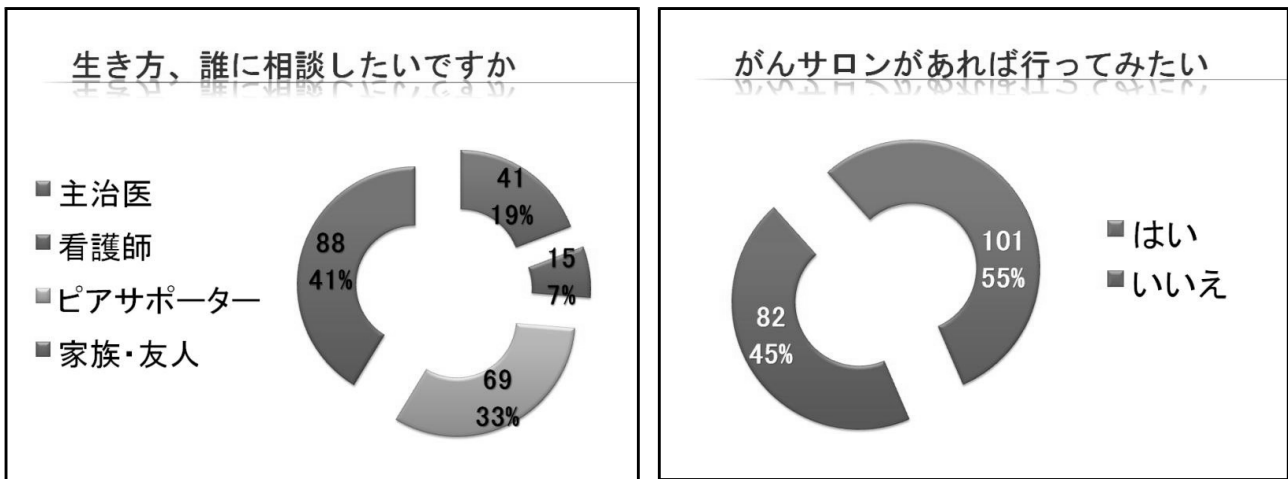
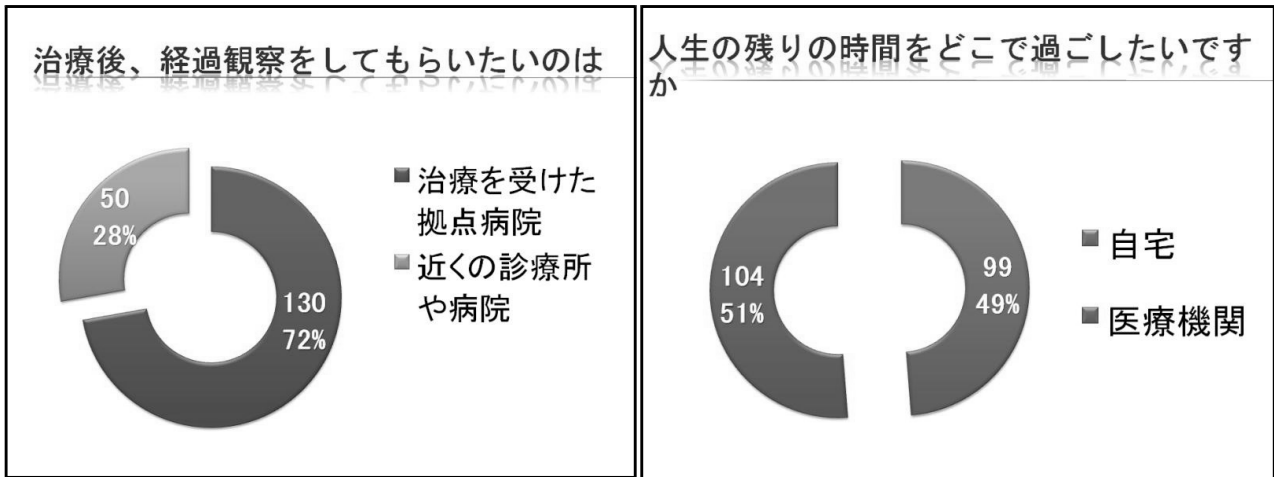
がんの相談窓口を紹介したことがある



回答者:医療者のみ

がんの相談窓口を利用したことがある





- ・がん患者大集合に参加した半数以上は「がん診療連携拠点病院」というコトバを聞いたことがない。
- ・がん診療連携拠点病院には「患者相談支援センター」の設置が義務づけられているが、そういった「相談窓口」があることを知らない人が62%と、まだまだ知られていないことが分かった。
- ・医療者は相談窓口を紹介している（76%）が、実際に利用する人はまだまだ少ない（25%）。
 昨年との質問で「相談窓口について担当医から説明を受けたことがある」人はわずか9%だったことと比べると、医療者の相談窓口への認識は進んできたと考えられる。
- ・治療後の経過観察は「治療を受けた拠点病院」を望む声は72%と圧倒的に多く、この辺の意識を変えていかないと地域連携は進まない。患者が実感できる「地域連携」を推し進める必要がある。
- ・最後の時間を自宅で過ごしたい人と医療機関を望む人とは半々である。いざというときに頼れる医療機関が存在することが、安心して自宅で過ごせる条件となる。
- ・治療の選択も最後は生き方の問題になる。そんな相談をする相手は家族・友人が41%、次に多いのがピアサポーターの33%であった。医療者よりも相談相手として多いというのは、同じがん体験をもつ仲間の存在の大きさが認識されてきていることを示しているといえるだろう。
- ・がんサロンに行ってみようという方は半数以上で、実際に何らかの形でがんサロンを始めている病院も増えてきている。